
THE TEAM！（番外編）～夏祭りの約束～

緒俐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

THE TEAM！（番外編）～夏祭りの約束～

【Nコード】

N2450E

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

毎年、翡翠達といていた夏祭り。しかし、掃除屋会に出席するように義臣に命じられた快は、参加不可能になってしまふ。それに翡翠は落ち込んでしまい……

前編：社長のわがまま

夏と言えば海、花火、部活に宿題。
だが、バスターである篠原快は、

「任務だ、任務。」

今年の花火大会はお前らで行ってこい」

「ええっ！！」

TEAM本社食堂。

大人から子供まで、快の台詞に驚いた。

「快ちゃん！！ 今年も射撃勝負するんじゃないのかよ！」

「私の林檎飴とタコ焼きと焼きそばっ！！」

白真と翡翠がそれぞれ文句をたれるのはいつものこと。

とは言っても、かなり自分勝手な言い分ではあるが……

「仕方ないだろ。」

うちの馬鹿親父が母さんと祭に行きたいがために、
俺に掃除屋会に出てこいって言うんだ。

これ以上副社長に迷惑かけられねえよ」

さすがは跡取り息子である。

誰もが中三にしてはしっかりしてると思ったが、
幹部達は静かに立ち上がる。そして……

「許せん！！ 社長を締め上げるぞ！！」

「おおっ！！！！」

「やめといたほうがいい」

その意外な言葉を快がさりと云う。

「母さんが絡んでいるときのあの馬鹿に戦力で挑んでも」

誰もが知っている常識。

副社長がいない限り勝てない。

そしてその副社長は出張中。

結論、自分達は殺される。

「翡翠ちゃん、今年は諦めなさい。

相手が悪すぎた」

「そうそう、おいしいものなら私たちがおごってあげるから」

「うん・・・」

いつもなら喜ぶはずの翡翠が、
今日だけは違った。

そして祭当日・・・

「夢乃さん綺麗・・・」

「あら、ありがとう」

アップにした髪に赤い小花の髪飾り。

紺色の浴衣には銀色の花が咲き乱れている。

誰もがうつとりする美貌の持ち主は、

今日は一段と磨きがかかっていた。

「だけど、快ちゃんに掃除屋会に行かせてよかったの？
去年、翡翠ちゃんと約束してたでしょう？」

義臣も間違いなく覚えているであろう、
快と翡翠の約束。

しかし、それを義臣はさらりと流した。

「ああ、もちろん覚えてるよ。

だけど、これぐらいの演出はしてもいいだろう？」

義臣はニヤリと笑うが、

夢乃は冷静な判断をした。

「掃除屋会ってたいてい長引くのよね。

あなたはいつも寝てばかりだから知らないでしょうけど」

さすがの義臣でも、

これに反論する術はなかった・・・

前編：社長のわがまま（後書き）

ちよいと書きたくなった番外編。ゆっくりお楽しみ下さい。

後編：義臣のお詫び

全てあの馬鹿親父の性だ。

今年は翡翠と約束していた。

バスターの治療兵の試験に合格したら、

誰も見れるものじゃない名スポットから、

花火を拝ませてやると・・・

「今年も賑やかだなあ」

「全くだ。だけだよ、

花見と夏祭りを一緒にやるのもうちぐらいなもんだな」

修と白真の目の前に広がるのは、

酒盛りをして花火見物の場所を確保するTEAM社員。

そしてどこから召喚したのか、

桜の木まである。

「だけどさ、白は紫織と回るんじゃないかったのか？」

最もな疑問に、白真は涙ながらに答えた。

「そうしなかったんだけどよお。

快ちゃんが掃除屋会に行っちゃうから、

翡翠が一人で可哀相だつて紫織も行っちゃったよお」

ここに犠牲者がまた一人。

おそらく白真のことだ。

間違いなくサプライズは考えていたのだろう。

「まあ、紫織は翡翠が大切だからな。
優奈と咲もデートより翡翠を選んだんだ。
今日ぐらい許してやれ」

修の言い分に白真は納得するしかなかった。
翡翠が夏祭りを楽しみにしていたことは、
誰もが知っていることだった。

去年、翡翠は高熱でうなされて花火が見れなかった。
翡翠が唯一残ってる母親との思い出、
それが花火だからこそ、

快はこの夏祭りの花火を名スポットで見せたかったのである。
恥ずかしさをごまかすために、
条件も付けたわけだが……

「分かってるよ。」

修ちゃん、今年は快ちゃん抜きで射的勝負しよう」

「ああ、そうだな。
お前らも行くか？」

花見に参加している翔達に修は声をかけると、

「行くよ。それにそろそろ翡翠が迷子になるだろうし」

翔の予想は見事に当たるのである。

「はぐれちゃった……」

林檎飴につられて少しふらふらしていると、

その視界から友人達はいなくなっていた。

「どうしよう」

「お嬢ちゃん！俺達と遊ぼう！」

急に肩を抱かれ翡翠は驚く。

質の悪い酔っ払いだ。

「いや！」

翡翠は軽く投げ飛ばす。

ピンクの浴衣が少し崩れた。

「おお、痛い痛い。」

骨が折れちゃったな」

「あゝあ。どうしてくれるのかな」

「実際に折られたいのか？」

そこに現れたのは義臣だった。

突然訪れた寒気に、周りにいたもののほとんどが崩れる。

「翡翠、今回のお詫びだ」

パチンと指を鳴らしたと同時に、

翡翠はその場から消えたのだった。

エピソード

掃除屋会が終わったのは花火も終わった時刻だった。
だからこそ驚いた。

翡翠がこの場所にいたのだから。

「快〜!!」

「翡翠！ お前なんでこんなとこに来てるんだ!？」
「おじ様に飛ばされたの〜!!」

翡翠は涙目である。

無理もない。ここは辺鄙なところにあるのだから、
帰る術は車か時空間移動のみである。

翡翠は両方を持っていない。

「全く・・・翡翠帰ろう・・・いや」

何やら快は考え始めた。

翡翠をここまで飛ばしたのは、
間違いなく義臣が詫びを入れるために違いはない。

「快？」

「翡翠、花火みるか？」

約束したもんな、治療兵の合格祝い」

翡翠はパツと明るい表情になった。

快が約束を覚えていたからだ。

「うん！ だけど、花火はもう・・・」

「ああ、夏祭りの花火は終わったがな。
だが、ここで見せてやるよ」

快は翡翠を抱えると空へと飛び出した。
そして召喚する！

「召喚、夢花火！！」

次の瞬間、無数の花火が間近で打ち上げられた！
それは、翡翠が夢に見ていた思い出の花火……

「綺麗……」

「ああ、すげえな」

快自身、この召喚は初めてだった。
義臣が冗談半分で教えてくれたものは、
これほどまで幻想的だったのである。

「快……ありがとう」

「泣くな、一度しかやってやらねえからさ」

ぶっきらぼうに言うのは少し恥ずかしいから。
その分だけ快は優しいと翡翠は知っている。

「うん、来年は一緒に夏祭りに行こう」
「そうだな」

今日だけは心行くまで花火を堪能する二人であったが、
翌日、この状況で全く進展しなかった二人に、
多くの批難が寄せられたのは言うまでもない……

エピソード（後書き）

夏祭りの話はいかがでしたか？ 「THE TEAM!（2）」も
よろしく願います

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2450e/>

THE TEAM！（番外編）～夏祭りの約束～

2010年10月15日22時45分発行